



保名
七三ツ面
山
姫
宙
中心
信
敵

帝般若津
之

道通文庫
文庫6
1473



録

保名

十三

面

山

首

中

心

信

紙

紙

道
通
用
紙

鎖

保名

十三面

山

如

首

如

信

紙

紙

文庫6

1473



三番

ともどもゆたなき秋のみくら時印さけり此舞振
 ともらばいと有難花のなはに花の御所
 頭より立鳥帽子其の4止歳も常盤さまかはゆ
 らしめ姫少松引年あまの中の橋を渡り
 萬代もかけぬあらし結ぶ今ふら枕は鶴と
 亀行の八千代の壽考あてあま二人のから白髪
 なるは滝の次こえて絶えぬ契りしなまのつた
 君を祝ふ千早振神をよめの一さ一舞は
 万止歳樂の勇むの出の鳥飛びぬとらこ面

録
 保名
 七三ツ面
 正山
 如
 首
 如
 中の
 信
 載
 土
 紙

今日も
祝子
さぶさ

鳥の羽も見事かな黄金の花々の
のた紫壇黒壇こらみちこきうん鳳凰舞の格
面やう
おんまう目出度祝ひ細々

あやのよき

川柳

二人

秋が来いそなたは
ほからげたのよ
ねばたのよまねが
花しまらみの
書かいであい
ぬたらあぶや
のかきの木れ枝
よた
いてみ

録
保名
七三ッ面
山
首
信
紙

袖であぐのねさうおたわしうこきりくす
 きうすたうふ
 やさう
 いきと互に打つてわかあをき
 こきり行く

大黒

永き世のともあわむりのみな目覚め甲子待と人ごま
 脊は天柱の代衣をおひ足下にまじはるゝ五穀成就豊
 年を守り神を尊げし

本調子 田子字土佐画拙 大黒

宿をかねがふ大黒は手ごんとの植をせら
 むこいこいこと笑ふ問はあつねがみまこいから
 たのしからしきやうやうなだんたのしやう
 おほえてかまの春あめねみまか年一は
 つちの子たちとたぐしもの枕の下のたから船
 からねの初夢は人のた庭み大きな池堀うて
 ぶくぶく水もわあすすがねんぎく
 わきらふいけのみきはよかあをぶつものよはいのながくたが
 るんはあいきとねがふおまいらまめは花のは江江

(敷)

録
 保名
 七三ツ面
 山
 道
 道
 道

左甚五郎

身まとすまるまるま里りありばばこそそううかかむむせせののああららまま

みみよよ浮うつつととああ夜よ毎まああははるるほほぢぢのの実まととううえ

ととをを同とららかかけけらられれととああははななががむむるるかかほほよよ

ははなな

詞 サアさええああららはは太た夫とととととささああももむむむむややああいい

ささああななびびくくののささああははははああるるももすすぢぢたたるるここらら

ののみみささななままとと五ご身しんののささああはははは迷まふふああららまま

二に世よああけけて

詞 箱はこのの内うちのの人ひと形かたち誰たれががここへへ出でたたややららアア聞きここたたああののちちりり

す
心
を
名
と
流
す

録
保
名
七
三
ッ
面
五
山
五
三
の
信
載
上
氏

すゐなわつめがわつとさういふはさうと思ふからんが
するなほ、あうりなほちやく。

のぼつあさは奪ちあらぬと身をつし
たあしひあてめいさいのち田沼様も人形はつけらぬ

詞 ちつたうしまふ人形あつても入出るとはなやめ
ような

心ちらするまきうていさかこしすし言葉なすし

詞 せつや+世間の人のうははわのほつたものは動く
動くといふは戀心と思ふとほうあがたゆ人形甚五郎

がたましひ入つてはたらぬか

いづかきとたつすはうつちまわりの

詞 びざんたふともなうていさかいはあが女ども心は

やつぼう甚五郎テ ~~あつた~~たのうらや+

オ、それ、大夫をみそめたまふときまがみつきまを ~~捨~~ぶ

たががみは女のたまひこれとふをうりこ入れたなら

ひぶつと女たちま、いさかまない ~~は~~うらや

ト、さ、志、い、は、姿、あ、ま、う、つ、ら、ひ、と、松、の、く、ら、あ、の、ま、な、し

ぶ、^唄、い、ゆ、み、の、あ、の、八、文、字、月、の、ま、す、の、夜、は、お、い、の、戸、明、て

客、と、あ、つ、ば、た、く、み、さ、し、ま、の、凡、俗、の、初、ざ、く、ら、

録 保名 七三ツ面 正山 道徳用紙

見よめた
ははまき
らぎの

すくろ太夫なうすや ねかろちるからわがらの
たけのいはねばならぬ わすれぬまきのしり

正月のうららむの文せいのりる太夫のこのちる
まはあぢりあすまのうららむのうららむ
けの輝のはかたの風は吹くもおのいあゆみをは
なうららむのうららむのうららむのうららむ
たきあこよそちのめかみお大ゆりだけばた
まはあぢりあすまのうららむのうららむ
とねのうららむのうららむのうららむ
なうはむしりあぢりあすまのうららむ

うららむのうららむのうららむのうららむ
まはあぢりあすまのうららむのうららむ
なうららむのうららむのうららむのうららむ
たきあこよそちのめかみお大ゆりだけばた
まはあぢりあすまのうららむのうららむ
とねのうららむのうららむのうららむ
なうはむしりあぢりあすまのうららむ

録
保名
三ツ面
山
道
氏

老松

本調子

老松のめでたき木と方木とすべし十八公れ
よんほひ千秋のみどりもなほ古今の色と
見す秦の始皇の御狩の時天候よかきもり大
雨もきり降るかば皇帝雨をしのかんと
少松のかげも雲あり給ふお松もちまもち大木とす
枝をこれ採とあき木の間すき間をふきぎして其の雨
をやらきりかば皇帝大夫といふ爵を下したまひ
てもうまつを大夫と申すもあやあやうめをたき松が
には葉をくふ白鶴のよけのとは君のまことけり

御子孫は亀の万知ふる川の流人の絶えせぬを銀
珠とくしとくと御蔵のしちちまのうまこえ
目とくしとくと

鏡

保名

七三ツ面

正山

如

首

如

如

道徳用氏

スナ

ミウ

互の胸をうもりおける気も合ふのすいたどし
 るもや二人が仲々は心でよがれてまもあかすかほる
 まいそといふひでの神々様を願ふたもお前故では
 ないかなよそいよまなとさういって互のうんきの真中
 いふのな顔してさういふこと舞いひよし
 よい人の戀といふまゝさういふあおるまよ
 ちよといまはて文のかほりまよあつたあんなと
 をはるも人目のでさういふらん
 はだまあつた御利せでさうを結はる縁の
 つなめらわれしめたら右笑いやアアアアアアア

おも

サアからには横町でかかれん坊や鬼渡一泣子と
 むろよ引かへたよと走り行く

鏡路 漁夫 花撰 山 宛 子宝三番史 ぬの信 紙

さんと添ひ臥しの花の錦の飾り夜具二十はか
 ろも積みおきね蓬菜山と祝ふちまらふ不
 ちせもまゝ家園めれ塩尻長く居すわな
 ほん子田舎母も貞柴焚く橋場たぐいの
 煙うつぐくおもとも賑をこころ大々神木
 門禮者梅の宮本も三田の土子も轉るるの
 を三すじ霞のつれ彈や三三三君よ逢ふ夜
 はちの途あらぬの森こゑ待乳の山と庵
 崎其の鐘の津かぬさるもあし中しや
 ないかいなおもしらや千村樂は民を撫

エスナ
 ミフロン
 ヤマウバ
 コダカラサシバ

であり歳樂は命と延ぶ首尾の松と枝
 舟町の渡守る身も時と得て免そく
 ちよ隅田川よきせぬ流し清えと棠え
 身も梅のかせ幾世のまらぬ白りえ

鎮野
 漁夫
 三才傳
 花撰
 北洲
 貞鑑用

スナ
ミツロン
ホリイマン
コダカラサンバ

北洲千歳書

凡そ千歳の鶴は万歳樂と歌あたり又万代
の池の亀の甲は三曲よまらぬて廓を現はさず
あらむの赤路の衣えもん坂衣紋つらふ初買
ひの袂伸たかよ大明の花の江戸町京町や
背中合さる松飾り松の位を見えりの柳
櫻の仲の町いっしの花も散りつとんと店す
がさきの風薫る簾かかるととと鳴く
や五月の菖蒲草はやめも分のぬ單衣いし
御見の文月のたよまこもまの燈籠よ日すの痴

話言ささかん言銀河と聞々ば白々と白帷子袖
あそよくはや八朔の白無垢の雪白妙もろりあ
がり馴深重なてろ二度の月見は逢ひとて見
とと合を鏡の姿見は露路うちかけの菊重ね菊の
よせたりも禿菊いつの引込みつき出の約束かき
神無月よ誰がまことより本立は山鳥の尾の西の
市妹許ゆけば千鳥足日本堤を去手馬の千里も
一里通ひ來る浅草市は戻りよは吉原女郎衆
が手鞠つくちもと百つした浅草寺筑波の山此面
彼面柴山繁山おーけりの繁き御蔭は榮え

鎮野
漁夫
三才傳
花撰
道遙用紙

行く四季をゆく。風景はけし仙境斯くやらん
墨田の流も清元と壽き延がる。大夫殿君は
千代もあはれくと悦びいそふ天のつ和合神日々
泰平の脚を進むる葦原の國安國と舞ひ納
む

漁夫

如子をけつるの夕たあまのしほりしほりの糸風
はみたる。あんなあまのしほりの船歌よ
いらははらぬあまのしほり行衛定めぬ
船の上何の意ら路の思ひははら夕日よ
美ものしらけしあまのしほりあまのしほり
ちろろそらろろそらろろまらるるまらるる
ひの夜あみの舟の櫓ひまの夕日のあけ
のあはれすまはたなをなをなをなをなをな

鎮野
三才傳
漁夫
花撰
道遙用紙

レシキ
キセン
コダカラサンバ

ふい茶のるる人の橋姫の夕べの口舌の袖のうら
の花掃橋の兒島の崎のしるしを走りぬる走りに
戻れば家のかゝるうらむしめしめし半にた
れを流しぬる内戻りて我のこころを
螢を集めての千たのの問唐の大和の里
の恋路が山吹流の水が照らす朝の山
の誰ぞも彼ぞも二世の契りはお寺院と代
去るはこころはこころだまよふらあつて
らういざら如来の衆生寺だるの歌のうらむる
無二佛の床言を指してぬけし長枕睡言が

けりのお経文のなまじだくたなまじだたせ
の届かぬ我思のほんよサ思ふ恋は如来を
まき見やちんせんせほみやまきかおのすこいで
有難いなまじだくたなまじだたせの届かぬ
我思のほんよサ思ふ恋は如来を
ほろのかたけの昔年の結ほれより何れに
ほくれてを連事も松よか有る夏の雨
岸べの茶や腰もちのけを松でつら
やれ蛤を逢て候しき夏夏の白

鏡
三才
道
信
氏

鞍馬獅子

嵐の誘ふ花の雪散れば狂ふ柳髪
雪は飛鳥で散乱し羽風似たる白妙の狂ふ
狂女の姿あやしけれ其の人よ物問はふわらは
が日守めらら達の絞の狩衣たをや
ちの細眉よ鐵漿黒々と粧ほしお白丸の旅
逢ふことのししやちうと三日月たらは教へ
給べの里人とうりつ涙よわけしなまき
我君様は鞍馬よよし鞍馬の里は八瀬大
原大原木かけはいつく大原女が高平の牛よ

戀も人を打乗せて高平て行きま
へ大原木かけはいつく可愛くと鳴く鳥
憎や添寝を起したホホホホ笑へく
早う逃してはたがホホホホ笑へく
笑はなんさんし耻か
菊とささる映す水鏡御堂衣裾川や半瀬
とこらは伊勢の神神風よつれと聞ゆる神
樂歌悪魔を抜つてそつをせい
諸國廻るよ天照す神を活な生業
襟子かけたる曲太鼓頭獅子の三人もへ

鏡
三才傳
道
氏

忠信

奈とちりぎはしるおの思のはほろもや静
小思ぶ都をば後に見すく旅立てやまらざりて行の
ぢも静 **ち**なぬまげみのまめ道弓子も馬子も若竹の
わけつ行けばほきまきすのばつとなつてはあらけり
あらくろつちなは子申あ身とらす我は急路よ
迷ふ身の浦山一移たまや初初かはのめらとつれ妻
持顔のはねばまよふまの海はきくやかたのたま
の御社にいとたうともかうく霞の中のみる景あき
てわたみの鞍のほいしくのむつとも人よはつむふきぬ

夫をたより突く杖の心ほろ野を打すぎく谷の鶯初音
れつみくあらばあやなす音のつれつれ招き音のつれ
おくはせまも忠信が吾妻かかけ旅すま忠信出せなふふき
あつせつらおろ野道い道ゆりくういなりつり
と目たぬや道だて悪信の待兼またはつり
いんはほく静さま女中の足とあなとつて思はぬ遅参
まのひらゆ免下きい静道ほの心づひ我君様のまます
は吉野の奥と聞たばのちをちも人聞て下させい
なり忠成程其の御慕はせはゆ尤きながれ我君様と静さまの
其の中は絶えぬありの妹せ川さうて行衛は春たつと

鎮西の
三才傳
一後の
道
静
忠
信
初
音

しんし

キセン

た

コガ

云ふばうりや三芳野の山もかすみて一けさは見申らん
静
 見渡せば四方の梢もるゝらひて梅えらうたぶうた姫の
 里の男の声々よ我つまの天志やうめけてすゝる膳ひらの
 枕はつゝもなや天志やうめけてすゝる膳昼の枕はつがも
 なやおうがらすのふふよ我初音此のつみ君のさか
 えを壽て徳若に万ざいは君もさかえてはあります
 愛敬りける柳腰よ中むらけやぐらたいこのさざくとあ
 まま神の若あひす繁昌まます其徳よ土ん田の箱は
 穂も穂をまめえたるらみやう一方石船色の實入はこと
 わた誠めぢたうまむらびたるやまやめ
 京の町のや

ちあめうらつたるものは何々はまがうはまがうはまがう
 見きいよとうつたる物は何々蛤早き貝合せ弥生は雛の
 しもせ申女雛男雛とらるゝおひさおひさおひさひさひさ
 は寝はまゝめはまゝめはまゝめはまゝめはまゝめはまゝめ
 たやらもしのりて後向浦ははははははははははははは
 のはのたまは男のさうと申おひさひさひさひさひさひさひさ
 たくたてあめすが実貝の實貝其の眞實も知らずて仇は
 きらしい何ぢやうはや一のめの時鳥くまもつゝもつゝもつゝも
 あめあひは藤の森のたぬのくら馬はいつくく
 馬に七ヶの元所こての手廻五ヶの鞍真先をけて乗出す

鎮座 一の小方 三才傳 道 遣 用 紙 戦 歴

はこぶ小足はちんどう早よ木の根岩のと乗こてあつばれ見
事やはせらうやせめてはうまきうさはいい性名添て給
けりしはきせ長を取出し君とやま奉る静はつみを
御顔とよこてよおまいし入るをあら福西國へは下
向の海は波風あはれはるまを信者うらま吹よる
そよ吉野は海まよひてそよあはれはんとたのひ
よかたみを取おきたるがよはの鎧を給けりし目と兄次
信の忠勤なり静次信の忠勤なり誠まよひかたを
思ひをさす壇の浦海は兵船するの赤旗陸は白旗
源氏の強者なりとくやといふ目かけし源氏の侍悪七兵衛

果はなまもたしはめ某はふめ侍悪七兵衛目清
と名乗るかけなままたなまきうらは花のあらし散りしはら
と相の鎌倉故都の羅敷の方々よ尾谷四郎こはあ
らううまきうさと討てかり刀はらうなまきうらなめ振舞
らるも優らあらぬ浪の上打あふ又音よつはえより折れて
引汐帰る一勝負の花を見せらるめとなまきた小脇まかい
えで由月のしらをひつかみ後へ引く足たぢくたち向ふ
行く足ぢりし何ぞもあらを引ちぎり双方うらまどら
を座腕の強きといふは首の骨を強あらめ
笑ひし何とはいり乱れ手強きはたらき兄次信の君

鎮座り一後の小方
三才傳口
道進用紙
敬遠

の赤馬の夫表は駒をわけす立ふまゝの静
ふあの方には名高きつよもう 能登守教経と名乗るもあらず
よひいそまぢり夫さまはうらめや兄次信の胸板またす
もあらず真まお柳あへなきさしほのよの忠臣義世士の
名をのす思ひせるも涙も袖はかほぬつらぬつらぬのは
まののたつはりの柳生の糸長く枝をうらぬおん突り
たもはらむしるべいとたふのよめいふらん守れと
たのらぬあはらふらら丸果承と見えおのり三の桂麩の
里にぞ着るなる

鞞猿

河をむれまゝだと告ぐ人來鳥むまじ月の名よ
あふ是も歌舞伎の周のまき次せも花のわたり咲き
一時一陽來復の當りを頼ふら始め弓矢八幡大
名のたのぶだ人の代業もむい町か又こしかへり
もふの頼とれ志といふ字が花鞞脊中まじり
た太郎冠者傘をさそたも春日山霞を分て梅笑ふ
春の野面の色ふもま爰鳴瀧の花の顔見世大名
立帰り今も春日と此の花の色香争ふ源平の夫は隔てし播
磨浮都甲はおちやま代守らの八幡大名橋平白
頼うたお人は北

鎮座り一後の小方
三才傳口
道徳用氏
鞞猿

面の更科来經春様今日例年のう始め猶も太平祈りの為此の鳴瀧の八幡宮へ御代参の三芳野ぞ御役目御苦勞存じます大老イウク其の御苦勞は橋平ども互いの事願ひ叶て又今年お前と二人物詣でこんな嬉しい事はござんせぬもう御代参の役目仕舞ふたよかは春の野もせと眺めながら手年を取て橋平も橋平是はきたり寄らうやまますや
狂言詞もかたくなに烏帽子素袍を假初ならぬたのぶだ人の名代は用であらばおふいに太郎冠者あるかいやい平はあはとうづきまる人目の関の袖つまなふで綱ひくるさひく四つ手引く山ぢやエ〜山ぢや木を引く麦

の白まはらば廻れ伊勢同者昔は車今は錢投せんせ投せんせまもせん紺せん花色せんコレ小紋せんよてかんせと引戻せんアなが縄手心もゆるな太郎冠者橋平ハ〜ハ道草のおどけはさう置てサアおやうた〜大老アエ〜橋まためつたは帰らぬはさう橋ア〜アやまた何故てはなす大老サアは主人經春様毎年の古例の通り弓矢と鞆を三様持せて氏神様へ参らせ給へとも今年はいかゝ鞆の損で戻らる鞆もやう猿の皮をとのへてこの仰つぢやわいの橋ア〜ア女中は似合ぬは用と仰つけはなす大老な橋ア〜アなはへ向ふ手飼の小猿のおりよもえんが中へかけ込はびつゝ飛の大老ア〜ア橋ア〜ア何とおもひては

鏡路り一後の小方
三才傳
道遙用紙
うとを記

何れもまきぬや猿こはなす事なる大何れも猿をオナ度な所へ放れ
 猿皮と取て幸の鞆橋 何れもや大かたうがはなすまきぬや猿つゝ
 なり放れ猿と見入ます大何れも其のまきぬはらいてはわるかへ
 何れも其のまきぬ逢ひたいものぞやちや見ゆるあなたへまきぬ
 目くら在所のとくぬ且那をくらりく猿廻し
 何れも村がく此の村へちや町へまきぬ
 何れもまきぬまきぬかいた赤かんぞ初心はまきぬ
 ちや舞台まきぬ出たらぬ出るくたい酒のまきぬ
 字の其のまきぬ見しなしたる猿丸のまきぬの
 く太史やいまい子のくおさるやいと呼子ど

初めはかほ
 のまきぬ
 まきぬ
 猿まきぬ
 ちやまきぬ

りもみちるまきぬ咲まきぬまきぬ目出度猿ひまきぬ
 紋とてかき裏梅の梅の林とくぬ小糸なる
 夫よまきぬ長そんたか寄をくくく
 貴様のか 何れも物ほまきぬや貴様と懐くはまきぬ
 まきぬ 何れも猿とぬやまきぬ此の猿とまきぬはまきぬ
 なりまきぬ 何れも其はまきぬやのあれまきぬはまきぬ女中はまきぬお大いぬ
 代系此度大内ぬはまきぬ鞆なる猿の皮へ入用ぬ船まきぬまきぬあなたに
 うりてまきぬはまきぬまきぬ 何れもたまきぬとまきぬお様のお鞆みまきぬ
 此れはまきぬはまきぬまきぬは免ちまきぬとまきぬまきぬ
 たはつけより 大よい女とあなたまきぬ上様のまきぬまきぬとまきぬは

鎖
 三才
 道
 用
 紙

猿さるの威いきをます
 素袍すわう投なげ大名だいめいの威いきをます
 一ひと張はり矢や先ますとくまかる猿曳ひき馬を飛ぶ
 一ひとアいのし待まちて下さるませわらなまするよらはりかも猿さるは差上さり
ままが射やりたまはるの皮かわは疵うき靱きはなますままいハテどか
なかもい事がはなます猿の一打うちと申すて急い所ところはなますれは
皮も疵のつらめやる只ただ今いまも打殺うて差上さりませる大いんちち早はや
う渡わたりハアアかいまつてはならと立上たり又ある
まましまちのどみは只ただ今いま殿との様さま殺ころせとあるなかめと
いばおまいもに只ただ一ひと矢やを射殺やり引り引り
ぬ強たく此仰おほはるなまきくふのままいこまいよ

小こさるの時から飼かいと朝あ夕ゆふは煙うき入いるちがかが
よてらいととらせしものを情なさない畜生な
いどよう聞けよ一ひとさあて今度どは人間に生なれかはつて
くるやらよおんごんだら一ひと節ふよ一ままらしはい
そ又また有あいなきな又また何なにかいなせひないと
も立た上たりありせむちの下まはる小猿さるのいぢらしさ
アは見るて下さるませ今殺ころさる靱きも知らず船ふねに真似まを
はりて居ゐるままモシ船に真似まをはり居るまま橋畜畜生なれど
物の意はいふもの也いふま命をいはる大大ワワ一ひとままらして夫が
殺する命いのちは助けを得えるわいなまいんならなんとおつけらるまます

鏡かがみの一張はり
 三さん才さい得とくの小方はた
 道みち途と用よう紙し
 ううままれ

あの大丈の命をお助け下さいますかやと嬉しくいふ女とちの名はあつた
いふとわかせるは殿様は武運長きの為猿まわつて能はうはちぢやう
かまざる日出度踊らが手元面白ニヤ
黄金のかづくは女揃へ庭まのまは花盛り
花実も栄ふ免でなきよは我らはおい
とあつと行を引とめ名いふまつたさうやまは
なんの事ぢやいあわたしはお前子打込でたま
さして候くは何ぢやい室の梅笹まじりける
鶯菜ちと鳥豆は毎毎飛んで行たやめ
のまは見れば見程程くまうとぬ際際のう

よい男男やとめといふおのころまごまごよさくのち
糸の中中ににまま一一おおののままいいははももおおめめおお前前と
めめいいととままののままららばばおおちちののままいいとと
たたちちののままいいととままののままららばばおおちちののままいいとと
拂拂ひひああららだだととささかかへへととままももららばばおお目目出出ちちやや
子子代代はは子子おおめめででままややくくおおままよよ所所ははああららひひ
ホ...ホ...
「このいしたるこのいしたるこまおまごまをたのむ
通る船頭ぞうをゆけんち泊りくを
なめめつち千秋万歳とたけらを重てめん

鏡
三才
道
用
氏

レシ
キセン
た
コ
道
通
用
紙

た所は千両松ヨリとよの雨あしたきに一人夜ふかよきた
ものをとちよと切たをあけせんかいな おとちよせん
お宿がおちよせんかいなのはとん とたしともエい
たしはなつかいな させはエさせば出てゆくねはゆるめ
さしてせんせオイ船頭さオシとオシと
からうぢやなおいな面白や やたはやりはをわさるて浮れ
浮れて

トル
テン
レ
ト
テ
ツ

せつよなるま

せつよなるまのういたいけた事いふた殿ほほと
うたうたさてもい 其方は誰人の子なるは
定家葛文のはもれうたやのい
ものせつよつらしてゆこなるまの里への
おろく其方は歌舞伎踊うが見たいの歌舞
伎踊う見たうは北嵯峨へまれの北嵯峨の踊う
は對の帽子をまやんときて踊るふらが
ヨウカイ吉野初瀬の花より紅葉よる恋
人が見よいものよとみく たらねあるきと下向

鏡
三才
道
通
用
紙

めさうよしがをばせしつゝのたまはしるし

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "Hiro" and "Toshi".

関の小方

関の小方は亀山通詞色をふるむや冬をぢり
まゝ初春の祝はぬふる袖の花笠夏は涼
しき詞秋も高尾はさいたるな紅葉
笠詞ゆき小方詞またをさう出せ小方詞ん
て拍子がめんそなたそなたくそゆき月の
笑顔は菅笠をならへそりやたが笠へそりや
たが笠へ冬は雪見よかぎすそで笠花の都の
御所ぬり笠やなうらよつて詞さきくどつこい
よこぎる花の一重を亀山は花の一重を亀山に

関の小方
三木
テ
糸
道
用
紙

見ると見あかぬ春景色

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

後洋

ぬるやいおあやい大鳥毛乃振袖詞ふ行列
ぼり立あづま入しちとちとちとあぢをめぐ
た詞ふちうのせあうはちあぢ
ちもんちよらさまよとせ詞まうのせ
またせら詞まうのせあうのせ
てあけろのせあうのせあせおけろの
さあぢとちもんちよらちよらちよら
ちもんちよら女郎衆ちもんちよら
まのやうのせあうのせあうのせ

鏡踊

三木偶四巻

テ 終 女 巻

道 遙 用 紙

う 巻 紙

あはれき。おちきいりふらり。おちきいり
さききいり。あはれき。あはれき。あはれき。
道中。河國。花の。は江。白の。あはれき。
ついた。河。川。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。

みみうり (かき)

「女子みすぎはほろむくよ。目出度。春の懸想文
こは恋路をたれり。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。」

「あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。
あはれき。あはれき。あはれき。あはれき。」

三木偶山巻
テ 終 女 巻
道 途 用 紙
うきとれ

花江戸繪戲場彩(清元)

白扇需花橋の香をよめてむうをうに春の曾我かは
らぬ眺めまた茲に垣根の雪は卯の花の夜討のんえを
狩場立白扇さかまはははかる東海は天とたまらぬ浮れ
女が扇の富士の裾野吹やうな風を引かへて十年の天は風
小弓に今宵を兄弟がおもふおとぎに大門と首尾待合の辻が
ためすもとき遣ふ番新を志のび松明打すく濡る覚悟は
簑と笠あやめもしらぬあうとと吉妻をだちの花なぬや
五月下旬はかぬてより契約敵すけ経が素かへ張子のあす
人形サアをて疋指鏡おここはとぬこえむづらかは餅

胸をおさけりわまかせこは長南とより七北よりは使
ま西能くやとる弥源次弥源太ゆあすれたまふか先生と春中
をとんと宇津の宮北山ととんほのかはさしてそんが
もいふつと二王舞をと望みなばはもととてりは出たらのた
まも仁手といふ神は酒を飲もるて聞かすかけもの
さし沙汰もたなくたがて君がお好もて草履わえすうち
えんてとれで裸なられて今内大外同前た、面目なしく色
ほや仁王も身をうつたまきこいつか夢か優曇曇華の花も
まきら父の仇大磯の四子の三松に仕着の物模様うへにそ
ろふて着更着やいなう終をかこつけに籠まぶる一いもせ

三木偶山巻
テ雅
道進用紙
かつとを祀

ど弥生は猶も夜櫻の花はうかれこの仲の町酒にめれ人の調
子ミチウわすれがいとやなほそらこもよほそめくれこもものちは
またの花見をたのしみは日かすかびてまもちほり幕引
ちぎらばいかにあきらめて午東弓取もこれほと詞なき所に
浪にゆりや沖つ船あふの山はこたえたと詞にかとよせかけ
て打白波の音高く風を便の湊入念なる假屋いせ思ひいり兄弟
枕に立まはり赤の板まで出頭ききもとの敵工藤を思ひの儘本望とよて
五天に名のり揚たる杜鵑つばき八千八町おなじみの勇いさみかと粹じゆんの名のし
おふかんぼん打た瀧のほり水もきくすぬ江戸子のかけ流なる
朝顔の花も露の濡浴衣水あがるんかこやつこい氷々と日盛

りを向ふ水賣おとせしこつちはわぎと日の影と二筋道の
浮世川うきがわながしわたくしの藝者の身夕べ過した奉酒ほうしゆうけふ
葛蒲湯の戻りこそ一寸むすび三重の帯とけて嶋田に風薫る
仇かたがな姿の燕子花かきりばなさのうはけの飛鳥あしどり川かほる座敷にまつた
顔かほ今初いまはつこやあまあまいどんいどんなもやうと氣心をあらせんせやモシ
腹が立あはままゆるやつぱり逢度におまの癖でわらまやれな藝者々々
で内証は三味線枕で客人とわからないとむちをいりておらして午
にたりぬわたくしをなかせて嬉うれしいかエエままくらくらいと引おせてすかる
をあげけんけんまつまつ記きとばとばいいままぶぶつつて立たかる所ところへへはととも
狐きつね又またやほりいいは舌の餃酒がともつ仲直りなほの事ことちうら

三木偶三木偶の巻
テ 雑
道道通通用用紙
かつかつととをを祀祀

承知のまよ後でかれいほあせぬ丸は玉子も切よを四角物も
言よ角かたつまはらぬまを燭堂や井火箸でちむむさむさ
そなたちまち泣上戸此の井の割たのを見るに付る娘が事今年
十二で麻疹も軽くはやう風さ引ませむつ十三で此やうにとあや
くり上たる溜泪倒にはむつと何の事た此の井が割たといつてお娘の
とで泣ならは水瓶が割たちうはうさまのをで泣氣かよエやう外障
のと腹立上戸戸は吹出フフフフフフはうせくくくく腹
を立ち泣たり〜こもも〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
物のふらのはめをたつとほえんせぬか〜に涙をこぼりたる筋を出
〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜たう〜

わけなまませ酔のまよもな〜さほぎ二座の浮立たままよ〜とまよに
やろとて牛織の本綿を新田紺や詠たちあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜桐に鳳凰竹に虎つも離ルぬけ〜ものさうや又い〜二注文
だ序に摺子木摺子鉢こもはなぬ染模様面白や〜と〜と〜と
ひきのおえ回に尽す娘ふ浄瑠璃と目出度筆に祝〜け
〜〜

三木隅山巻

テ 稚

〜

道遙用紙
かつとを祀

とみぢらの橋

とみぢらちしーのたまふる袖をかきぬのこころいさよわ
つと耳をばあききよきとくかーかーかーか
つもりほどちよあかきさのゆきをとるらすま
のさかーとくさーとくさーとくさー

若木花容彩四季

春霞引けかきし 武士の矢猛心の兄弟が十八年の天津
風ふ吹かへすよや町若木の花の對面はこれに顛頁を
釣狐 **わ**は化たを面かかを二藤も写す水かみ北斗の星
も明の春また若水を汲上げてお取立なる大役は一陽苦
学祐経が花の庵へまゝい寄る蝶と千鳥のはれ袖 **君**の代
は千代に八千代をまゝい石動ぬは代のこころいさよわ
介様のこころいさよわ **秋**野にあらぬ春の
野にあきらむ雉子の親鳥を待たせけたる推がもと其のむね
んさの月と日を五つ三つのこころいさよわ **小**ら **小**民を取添てぬ

三木偶山 **丁** 稚 **用** 紙

らの的も狩人が若草あづる草かろ山杖の野みちつらとく
たのしくと足つまをすの丸亂る霜柱をのそがとつ
大のさかアま浅まや恨めや野子の性根うはげんは
渡たら鳴子買引もぬあれけふのお目見え梅あは忽
み寄きせんとせんす我庭あの花よも入来りし二人の者其ま
あやもどかたはたの役目やし付たも此祐経の思子存細
たの事最前より立ちまよ正しくは成ほどは推量の上は
何をあつまん我々は河津の三郎祐安のめすおがたみの兄弟
二人あはせん身は兄の二方今は祐信の養子とまう曾我
の十郎祐成と名乗ます三又弟は其のもう箱根山の兒をた

箱根山とつがなは箱根と下山り

三兄弟

ち北條殿のあづ子にて曾我の五郎時宗の御用人は祐成時宗
祐経よりつめつらしい対面ちやヤア親の敵祐経かんわん可いはず
りこのちやにおもひ込なる其のありまはあはれは似たは
のたとはたは河津は祐安に三ト思ひ出せばうまよ語る
も過しのも君の名代祐経の二所権現へ参籠し初見糸
の兒もや紅葉にあま一家なる河津はか亂と聞わらにみはすま
もんろく原の通ひ政をゆるせよ一時こそ来れこえなれ豊はは
りもあらゆもかたき祐経がほ見覚ええはなかくに
まの香もき佛にも蹴やあ破界魔けいあゆらふ動が
籠に荒行の念はんに成就してあま廻るあま祐経をのが

三木湯山

丁 権

道通用紙
戻りがこ

とし物を飛ぬらるるを。其かへやくも春気やら屠蘇の
きけんの知らぬも。テモさつても氣みじかな。
南京のツルツルとう助殿から。テレトウテ。チンリントウケン
北京のおさい殿へ。ツシットツン、テン、チケンフテシ、チケン
唐侍へあるチリチリチリチリ。送る文、いれはこ
まづこゆよ。ツシツル、チリチリ、ツシツ、ドン、ケン、シヤン、
文字あるまま、四角浮世は儘ならぬとせ給。
すさまじく將中をもとらう。つら、夢の消忘れの時字か。
俱不戴天の仇敵みならしたる。金剛カサササ。くもま。
いさ。ま。から。造はやるは尤ながら。此場で敵討れ。ま。

役目終らぬ世の中

〜さうやまたなせ。富士のは狩の物奉り。其は役目とあり。其内
は此身にあやまちあり。兄弟は。養父祐信が身の上
と知らる。二つや其役目あらぬと。敵と討事叶はぬか。
寶の山入ち。空は。かすま。此祐經が別荘
へうつし。野田の地割と。是る見物のせ。見渡せば
実白扇をかま。か。庭地。東海。天もひら。築上し。福
野のさまと。野。給。ま。中央。ま。表の。假屋。
は。春の山邊の。張。月。籠。あも。袋。納。
舞。朝。影。和。田。山。立。波。も。女。龍。男。龍。の。三。鱗。を。
果。龍。の。勢。り。や。狩。場。に。あ。つ。け。は。相。馬。の。里。

三木偶の巻
丁 雑
道徳用紙
戻りかこ

一文字大天方大音と似ても述き四目結五三の桐や花うつす
かすく多き其中に乾た雷に狩屋こそ花待得たら社經の時
も幸ひさき高に下旬に討人ともやア女のこ
あは時鳥どぞで此身めりとの鳥名残男鹿の狩衣其丸
雨に晴間を待てつりや本望とホ云るや及よ一様野下逢
ふさらば雨の井に高き時鳥名を方天に掲羽の蝶衛立ち
び赤井の極敷踏ちりし後や枕の兄弟が本望曾我と末の世に
かぶきの花を祝けり

下のお巻 三人をよめ

主林間の酒をあたる紅葉とくみはるも舟月が

秋の雛も一つの衛士が役目の紅葉ありさるも見ると
あやうさいたたけのらまのさちりる酒さくまを女氣
をくんで見たまの願ひをなす近馬た初春のよとやゆ顔合せ
とらかりのつこの字とほよ外もみよわでそくやまのあや
あまた中打つれだちてあゆみくるヤリくろあはお夜のおそ
ふもちきるとのおかばはやくあまのたといあのだた人の
まが私かいたとそ何のやまよまのかいあま夫はきくとつらも気が
るなあな黒又えんはけななせ見えぬへたのさ又てつらと酒
ひたに成てる知らうよハハ幸ひあちりに今朝一や十内えん干
ち夜よりては兄弟のは方々はサ幸けあの今様の

三木隅の巻

丁 稚

大志新の巻

道遙用紙
戻りかこ

其姿花圖繪

刑かしの今筆の後今をむの風の流よのしも
らつして俳優よまねた土佐繪の仕立は極ざい
あまもわららん花おに蝶舞ふ紛々たる雪
かさくらの山ならで豊葦原をすいな代は色
でかためてふくだてついで譯よりはらと夕暮
よすや男と名よ立髪のこしまねをちの大名
ころきを伊達なみつはむらさきとほほ
置つてあつまたんせん寛くあつよ出立
其風俗もさるさるらんあよとほほまよ見

あよつものさるさるらんあよとほほまよ見
ならやつちやあてとあよとほほまよ見
本柳風よあねとどららんあよとほほまよ見
ごのかたへなびこよなよとほほまよ見

の丁

奴もお供で目の正月とんとびやくらいやつちやく
太夫はまつと袖あひい

傾
おおかまたあのがちがめさんす事はいの
よ
い
や
せい
もん

ついでにんだるかんなへの緇が顔して羅生門つほね
かへとうあれりけるもさやう有其次花のるじ
あいつまでもふせい有らるまをいなり

薪荷雪問のあり(山姥)

田面狭々たる足柄山麓のわゆる推か木崖の
深る蕨かつら君命うけえますすら男がままが
たるしぢの高枕はよ一瓢のたのしみのの移りををさま
す山おろし

山高しして雲行客の後をうづも君命うけそ此日頃か
く山賤ときまきかへ深山幽谷きらひなしくゆきなるみ
の気は酒ぬあたましほドリヤ一盃やるべいか

まけはめりなき盃のつげはうつらふ星の影
ア、うおやあやち容早爰またんたくなし我加盃中に影

山姥

丁 稚

道 通 用 紙
戻りかこ

まは叔は一定人傑の此山中の有といふ天のまらせの可も
廿の奇異なる事を見る山のむらやうのいふことめたに
當りは山住の女がつねらつもの子花よりやうくの心侍は
錦の袂引替へ木の葉衣を露霜子染ておける山姥
と人や岩間の苔清水心細道たどくと杖をちあらふ歩を

くま

オ、おあつかけはまた逢ませぬの

山姥 山姥のよき花殿またたき火のは馳走ませぬか

山姥 又は赤ねへ時の子花はどしとまらたな

山姥 さればの後の林鹿まづれ立て来す。たがおほかたきいふや

おひのすまゝかな取ておませぬわいな

山姥 くれはあつていふのく後へよばせ

山姥 けんのまおとまゝ事とは有ぞい

ア、おとまゝとかなち事丈と見付て

山姥 あれはらうしませあのやうな大きな石を持あそん

でけがでもあたらとせしとおもゆるを道くま程がある

コリヤ怪重丸 ーヤイ

怪 オイ

神樂月とて片山里を笛や太鼓で面白や足のめたい
にぞうりかつたもれ子をとろくどの子が目つ

デ 稚 道逢用紙 度りかこ

たあまの子が目つき籠めくからの中鳥はいつ
出やる夜あけのはんまじりつはつはつた木の根さ
さ原くぐりくつてひよいと出たみどり子

山姥 こゝ怪童早うおぶやいふ

怪 アキ

ほをきたまて山道を尋ね木咲の梅の花よに

怪 かおちうんな花折て来たよ

花ちせふとみりたてつら盛をあらうとせ

山姥 やし子花よ帰つて来たな

山姥 かおち戻つておぶやのたのふやうくつひの通つおち様へお

あがしや 怪 アイ

山姥 かおちおどがよう出来ましたな

怪 かさまの何を下さるや

山姥 おちうしう存んでおぶやつた其るいびよ此間からあつたの

織て着せと思ふこた山路めくらぬたのひまよ五右

機立る窓の内

枝の結鳥糸く綿く織りて着せたる母のゐんま

子里へさがればささよの土産はぜんく太鼓ほりり鼓う

や空蟬のから夜子せい方せいのみめたる合太鼓の拍子

面白や

道遙用紙 戻りかこ

キリ

山姥 サア是から馬をよち

山姥 ドロしおなごの物をかこからし此まぢの馬を

山姥 さがはやこやませ

怪 月毛のあらぬ斧の駒ゆるやも繩のりしはよ

怪 先のけりし

山姥 お月称いろう 十三七

山姥 お供はいろう 八千

山姥 母のたい内けやぶつて産所も
うゆも山なれを取らばおはぶし事をかき産湯に
替りよ四方の赤木びせられたかどつともかしまつかくな

て北嵯峨の踊くときは何とらおらが在所はな奥

山のうちのどんぐり栗の本のまの根を枕にござんた

いそらび寝

怪 から様ちのま

ちのみたいと足ずりはくめんせな子のならるか

山姥 こゝろあつた物事 是あら又いもの山めづりたなし

きこ聞せませ

山姥 なる山のけりのはなし

山姥 何のいさや昔話もはぶら有し安もどくやらむめり

の髪洗ひ若葉を見ては春を知り妻乞ふ鹿の音を聞て秋

デ 稚

道 彦 用 紙 度りかこ

と思ふて深山路とあらた〜の山廻り
 下しあ〜甲の山廻り四季の歌もい〜の深立空の
 彌生山桃が笑へば櫻かひぞる柳は風のおほよふに誰を
 待やらしむまね〜霞の帯のま〜しきめ〜の
 盆踊〜この池のう〜ぎの〜ら〜過しの旗の葉は
 露の玉草おちせめて〜これぬらぬ袖の梅ついたまき
 ぬ〜室咲の〜梅の曆も市早く門は松もや〜終
 離も出るかと思へばほ〜きをあらめ〜間々盆の月
 待宵過て菊の宴はや祝月里神樂ほ〜め〜世話
 敷浮世も我も白雪し〜る山廻り〜

山殿 時におち〜ら〜思ふて吾たが其方衆二人の身
 のよは
 山姥 お話申すも面目ない妻かまは坂田の舟人時行武門の家はあり
 ながら柔弱那力の身を〜やみ母がたい内は宿せ〜子何と
 と勇士に巻こ〜あ〜天下の衣を巻けさせど〜丈の遺言
 山姥 梅は舟人がわすれ〜み〜ある〜某〜は頼光公の御内
 めた〜三田仕と申す〜の怪音ぬ〜勇猛力靈夢の〜
 々と〜か〜ま〜力〜
 山姥 おも〜
 怪 怪重女方の力の程の見たいとち〜ゆるえつ〜の痛

デ 雅 道遙用紙 度りかこ

りのかめきゆすもるまけまじりて 怪 かつてんた

神變不思議の怪童丸もまたはあゝり勇力士怪童といふ
て言方なる松も根を引抜るを笑つて立たりしは
人こぞもさうさうのうたう

山賊 松の根を面白うつて来い怪童丸 怪 かつてんた

打てかぬを身をかほしすもまじり強気のカ癩幹より

腕のうらむを志つてつめめはめりて あんや かくと

おぢ合が中よりつとねぢ切て左右へ分て立たり

しは目覚めかろる次第なり あ

山賊 ホカ力の程は見えた 今よりしては父が家名を其の伝へ

山賊 坂田の金時と名のらせられぬ **直**に同道せん

スリヤ父が家名を其のまゝ坂田の金時とやられやうれ

しやなや こ 怪童と云からは坂田の金時といふ侍ぢや我におと

なし う まま せ う ぞ や

怪 人からおれは侍ぢや あ の か う れ ー い ー

哉 何 か う い は **道理** と さ う な ら な ら 今 あ か れ ど は 母 の と う 違 ふ

事はぢらぬぞや あ の 別 れ の 怪 童 是 一 ア ン ー

夫のかたみと見らるつげをまたの大事き大切さけふあかる

れは よ い し よ 母 一 人 寝 の お や の 内 さ え 面 影 の ち つ か し

から **頼**光公は奉公 一 と む る ひ ま の 明 暮 に

道 雑 用 紙
戻りかこ

山城 武志あつとははみま身せよかからず人様に

山城が子とあらはれな今別々も此はけりそなたの
か身は付添てなほゆくすらと守らやしとは云いよ白雲が

~~山城~~

名残あやいとあしがしなまあたしだもいし
一聲がくだまよのまことあはれなり

山城 かくははてし怪童丸 お頼み申すは仕さまなこりは
いとま申して帰る山の巖も木すあつて白ぬは源氏の
なまきまの神がまはれしつきの雪のちり積つて山城となり

山又山ふ山めぐりして行衛も志れずなりまけり
かた所へ

猪の熊入道もせり連れはせ来り怪童丸と見よ
正盛公の上意をうけんちを方にかへんとあめけと見れば三

田の仕扱は源氏へ引とられた

山 志れたるは怪童丸はちつた今頼光公へすいよましたは奉公娘
こいつらと引くつて君のお土産怪童めかると

怪 つかよめらめらみな二度にこしく
猪 何ちよいせしな者もそれ

やらぬと組付よの者をいふのめんてつてなれかつらるる金時が
まさよかける冬聖林一陽ひらく知童の花並舞はの葉ををめて

デ 稚 道 通 用 紙 度りかこ

丁雜

ありやちんくくういしなわあちやんくくうい
なりうとけん酒たがむんまじりまじりかはれす
まぬい夜の帳面もかみちちうか酒樽をさげて
びらく鼻のこゑ水のこゑよまほかゝもちとぶき
くで見たながら思はばおのねんぶりよにまやも
いらけより喰けまはるあ道ささはちらしてきた
りける日あちうのこくであそびの仲間いり大坂前も
ひまつのみたまの袖よかしばいあんなんたん女
が大るかははらららうだいこまんちやはるいあ死

あんめいびんくるまじちやうはんあまらあ
うしあさすういりらふおはしたあまらあ
あやすあやでりちあせいああでりちあゆら
つらんそつらんあまはあけのなまきしんす
らんあまやうらあはあはあちちああああ
ちんあまあまあまあまあまあまあまあま
らあまあまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあまあま
日向あまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあまあま

ふはまのしんじつは清めぬのふかきよとて田舎赤坂
かじ甲まきついでしおのぼりてはたけいとおちとお茶の水町
もたしむるいぬみおのぼりてはたけいとおちとお茶の水町
もたしむるいぬみおのぼりてはたけいとおちとお茶の水町
せんだきとぬちほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり
ほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり
の目のまな中ほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり
るのまのまな中ほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり

文彦の康秀

あつた鷹の羽おもしろいと小鳥めあげてひと
のよ其人からも康秀がもすれよあやゆる猫の京きやう
とがぬちほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり
らしいなちやいなとお清おのしらぬははよおんと耳の口を
海山風は嵐籠とておもしろいと秋の草木も
あることいふよとは男ぶらあはびぬ具の片だより清は
いづは有ましか空つと突のけこりやとよぢや白軍のしらぐま
谷の梅うめおたは高き出展いだしん右
見事みごとおたは高き出展いだしん右
かぬちほりせんだきとぬちほりせんだきとぬちほり

道通用紙
度りかこ

Handwritten text in a cursive script, likely a translation or commentary on the adjacent page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

おはや
よ兵五 道行誰夕月(上)

いづき 道梅をばすてい となりあるまのぞ
れうたの 胸にあたりの人目さへあやなき世中
の凍とけて 凍之卯 見合す顔も今更におは
や兵衛ははづかしと夕づのちぎるぐらき身を
餘所にはしらでせまじやと 噂もつらきみだけ
縮や麻苧と仇名もつまじく 世継繩手と
聞かすに其あたよめとる訳もなみちありしく
春雨にふとした事の間違でかかたつた二

道行誰夕月
度りか二
道遙用紙

今が身のうきをたのめぬばたのめと云たながら
心中と浮名も立は猶もくもつてすまぬが
りおまはとみを生ながら一説をとりくり見者
人ふにああやさまままたえんな事のあて下き
すかたんぼめたしが女子じやとくは浮名を同じ
罪科とのがれぬ縁加雨路程必互互に説も難波
江の芦のかりぬの一夜に思ひ違いの床のうち
抱メあめたはたはたこの手に嘘はたきけない
流れの果と嘘やお代さまのお下ケすみ十
即兵衛様のお腹をち不儀しやなけれど何と

まあ一人りながらういられおそあらうのうち
をすいりやうして進も因果とあきらめて
いいおそ一所に共兵衛さんいなんとせせひ
かない社上は諸君に暮をししいいといいと手
もとと先へ立場を曲りがぬ渡しの方へと愛ら
在所にあよい子の嫁菜田芥つ出とあせ道傳い
流れ船こちよつと小禮をぬらしたアしよんかいな
後にもかろき口拍子が過せすきや五三ッ七ッ子供
相手の商人か取くんた関と今か勸進大角
カそりや濡髪はな丸駒まけるないつこいコマ

道進用紙
戻りかこ

こりやかわゆるしちよたるよすめ口ごうでんす
しなきるあかしやませ見えればしよさいもなんしや
やら鴨や羽白はま愛むせぞ角力取となッリヤあかし
イあかし鳥におこせれて朝から晩までとつこい
足にまかせて氣任に蝶か遊ぶや若草早にひ
かれて引水てきたりけるシエニこれく姉さへ見れば
近所の娘御をあなか草深ひ所たふくはおしい物
だなん江戸へ片付く氣はごんせぬか生モリやモ
江戸へは片付たいけれどわしらかよふなものをどお
してたれか生ヤあるのもよふたんする氣なら此

^生あきんとなんどわしか女房に成り氣なごんせぬか
^生おま(か)お生にしくこんを山水を商人たといつそ
そわわらつた物じやないよ見せたいナ生モリや
何をへ生おれか内をよ生こんをどごんすへ先や
つがれか住家といつは四方中生棟高の瑠璃のい
しす(珊瑚の梁柱に蒔繪三重たす生伽羅
の欄間に花かつみ釘隠しには黄玉の蝶花
形をと思ふたばかりそふゆかず中九尺二間の
裏住女房子ほむけらいにむ鼠の外はたい一人
となりは梅戸かたは煙管のつふれとどけ

道遙月紙
度りかこ

へたしよる花堂おぼりに山ぶ殿

伊勢道行雑々目(下)

い志程に致にまた大宮のめいまましく思ひそ
め茶のちちやうらほい綻を志原にしてその物をしで
惚れた氣をいづつとどろどろ女房にと取手をはらい
これなりしをいふは村方の日待にこつそり
つれおしでい池のせうめが朝日にかがやく夕日に
たを引まこものかがげにひあいとびちやひよいとほは
こあてはねたはいはねたらどやしたいせうと婢は
いはねるか志やうかんいそふだをこつこい田舎か

度りかこ用紙

どうのヨヤニ おかしらしとぼけた色しや有べい
にやア 心ぬれをぬすれし咄しのろしろへにや来る
上無術をかわへるおあやふたりはこをたな何ふとも志
らず漸くけしり付キ 心記あ水程一所と約束してだ
まして置てた入り サアともにはとよもとおもやゆへ
色しすれに比上はせむに及はぬよし心中をわ
かりんをらき、わけ かくひまよいかやれ
まちをせし ぬれと此まき づやならぬく
もし誤り聞ぬと涙ふれをわゆる心中でうりませうか
きりなめるいあう洞 張すとどろぞ動年して

星をるむが悪事のころだマア 待つしやりませく
川馬に江戸も田舎も色事の果には又口中と
そんならラらまらにも 王女かおとししう婿すなの
第うの晩がの事だモシはなれまいをど手サアて死ぬ身
しこわき 幕の下おとろかおめにつま、ぬるや夜つみとぐ
るく 通行に常なき切ををんがうくこ浮つて名代
の小豆餅 へをばの馳走のあげくにははやすつふら坊主
ど朝丸に へみやいな命を生延て目去度夫婦の道
七坊 へ我オは酒と女郎にやくわんでうで蜻手も足も
きつちり結つた大晦日 へこそにこそぬ借銭のぬちへ

度り籠二用紙

はまつて 身をとよまよか さいどししやうかこう正月
は 韃 禁 喰 腹の春命かあれまじやごんせぬか
鯨 磯とらふす 野べしそふんのいな 掃と
つ所にくらまふらふ いかるす 玉の音にや
ましである いまこり 死んで死みは 咲かせ
まい 南をさへ 目がくらを におえりせん 異見
を聞てくれ 二つの鏡に 打連れ 急ぎ行 見おろら
ずの今のふたりが 深切なるあの 異見 見おろら
るは 辰るけ水じ下かたならぬ 身また さまた
けちのうち さいまじやとまむに くのう 一の命

やいかならん

戻りかぶ (上)

いあらまのどし 三つをさう まちわびてまたる
か手にまのりほを あはせか みのふんさ 色で
るがよつでか 花かひとあふ はまの死か 月
にうかるうはまな月 にくまに くる 月ばまに
いおれこみぢやがつんじや かつんじや
いけこはまか手てはまこの花 みのみさだ まま
るちこちやいめじやごの みぢか せにやつしぢい

戻りかぶ

ししきうぐまたちけり。いんまかりきでたるものは
あづまのよ四節と申かじかきよるいんまかりけり
たるものはなにはう次第作と申るらひかおかきよる
ア二流くなんぼあぬしかなはわくさつていん江
戸のおおなむさきはあまのりがくや何ぼこなし
かまのいけんして江戸に又大坂のよおなあけやほご
んすまいんかのかのいんさうろくが見せたのり
んまらまたすけのしんまらうぐのまらあのおよまた
はかほごんすまいんさうろくかや流るしにあすかや
ま上野のやうなさくらあるか。いんまらうぐのり

るが見せたいわいんさうらまたいんまのよおなけり
ころな御屋敷があるか。いんまらうぐのまらあのおよまた
て見ろいんまのいんまはあやまらうちのいんまにござるま
いんまのなんのやうなした。あまのいんまにわけた。いん
にぼくぐみあのおよいんまのいんまを見せやれいんま
たるほとんぱいんまのいんまはあまのいんまにござるま
ふくいたそいんまのいんまはあまのいんまにござるま
羽こぼす者らはあまのいんまのいんまにござるま
ある林にうぐみまのいんまのいんまのいんまにござるま
よるかたのいんまのいんまのいんまのいんまにござるま

まづこゝにこゝらふよひあいかたのもどりかご
と次郎作。おらぶのせもまたふらそどはるなごである
うなゝあれはしまぼらのけりせい小車太まのかたろさ
ゝるんちりこゝよびちしる。志まぼらのくるはなし
をまかよしやあるものか。是はよからふサアゝあね
まこゝおちゝ **山**谷の元あけさうぐしすのまださ
と流ぬふせいのさちひあゆげなるそのそぶり
かしこはマアなごといやとこらでござんす。こゝはむ
らちの野といやとこらにふたごあぬさし。何と志まは
らのくるはなはなしとあはしとまかせるとまはなすか

ゝサアそ取を **こ**こそのかかりにおれは江戸のよしはら
のいろことをあそびはなしてまかせるはこほろぐみおめ
しと新しん町のはなしをするまはちのかどらだく。こゝそふ
づいばあれひまた志んまらごは死をやつたものよは
かごかきにひまかへる。もん日目の日の出立はこゝま
きはをりひをらまよしやおこのたんせんすおたゆ
かけくゝわんゝあつ出立。見えたらわいゝそあそ
あらうよとこの事たそのはなしがまいたじわらち
ゝちるほどはなしてまかそわかかえ志んの大かちの
ゝおつとそこらはかつとんといまづるらつてまし出せば

れいあたうしふるぞくとそのまらうつあみざし
だいにしるたたちわたりふらうそふ出すはなほ
おすくはまのゆきよのこしあきはさうふり帯
のあふつこいふ下ふふつこい中のくし中の
さぬにこかれ志はぶねのわほりゆかしきひとらま
どつとほめさむしたさすがあしものおとこやまふ
からはぐはんらいつあはふものぞこんどこのたびめさ
んたきせんきかせちるのわ出してやると志らうつみ
あみはこちをうまゆ志やうさいどにいろがあるは
んにござらばまとかうござんまどはひろかれ身はほ

そかれ志のびくる夜のそのあうそくはこひのやつこの
とふもの
ばはなをさるぬ
んならわたしがあうゆそのあいつにはならぬか
志んきかふろくとたさしそつにらわちるなわ
け見えならあやわあ志よを志まばうのませよろそ
あるあいの心。そとごながららうちではせかれほんに
身もせひあうれあるあめのやまぎのまうちまごいく
たびかようさよちどりになくかまよさいかあしきちわ

戻りかご (下)

やんや〜いぬこまを子まやう大さかのはなし
はすんだといひのたき〜これから江戸のよしわら
はましきよ四節たのむは〜いまづおれかいろ事
とらふは江戸でござし二丁目ござしすみ所京ま
ち小見せをなし河岸でなし〜してとこおや
づかしながらふらぶるよ〜ハア〜そのほうかあや
るの〜サアそのはましかまた〜〜とめれといひ
はづかしひかひの袖であるがほろおびであるうが
あいたらふう日にやッやみ〜よめなりもんほ

やなぎばしほちよまきよつでいおふけれどやつをお
つぼ目^め知^ちけたでおびを志めなむしてずつかけ出す
せふかにやッ地^ちまわつがしにころまほるついで手ぬぐ
いのほうかむり〜月まち日まちだらまちや田まちにこ
ざるほうろんさんのまわりおふだやうらやさんよく
あひ志や〜木志やうと火志や〜すつけたばこの
穴ざらさ〜つほう見せのまきしはみじかき夜
半をきり〜すま〜ら〜し〜うめさ〜り〜うめま
どろしにあだくら〜まめら〜はまわ〜ん〜ぎのく
ぜつせぬ日もちやらんざげ〜はから〜し〜ひ志やないか

ひま **レ** へなるほとまつひものだ。くやまたまへまち
のあけをといまはつちものよたまこしきしひま
ふねかこひかぎりのたいこをうつまごはをぬあ
にぎやかま事なんとはなしてまかそるか
りやおししろあろろ。サア〜しよらうきや
へまろあげをのわすはすこけん十三ぬんろんを
ひやうしたか九ほんの志やうの九けん町ひやう
たんまちの冬にうわむみだのほし心ちつきぶしのう
た三味せんのおんかくに。こつろにはなをふかせつ。歌
舞のほさつのあけをいか **レ** こひのやまうち。うねもた

かまのやしろのせかいにすけよしやかひなれたる
しんまちの井つばにかけしやまごあゆかりのはしの
けんからが。さけにそこなまさかつまひすくには。うけ
ぬよこののひらじとまきけはらばまきや。手もとみや
ことねぢじやうこあれ。あかつきのめうしやうかにし
急あまきやひがしほもちうりくち。りくちとちと
りあし **レ** まきやほらまけん志やうなし手なしのくせ
りしてあるじやれいふたりたいつう志うちはあるまい
か。びういやりくつかきがしれぬ。ト太 地方 まがころをひい
たぬばそごでまやうめひむつ。とっし。此あな。つくじ

をこのよろにうたほくかからなみだくみそりやアハなん
の事おやいな。わたしやおまへにうちおんで身をつ
くしたるなにはかた扶よつすいなまのうらにたまされ
てさへが。あろのやみひそりひやうぶのやゆこもりあだなぬ
しめのさみせんもいとしかたをよそくうた。やがて
あろまへゆく身しやまのさたもとてつゆをとおまごた
つとんだくせつ。あろじやれがいのちらおまの江戸
しまん。つめらしやんしよがた。かんしよがた。ひ
いやけんな気味はなれた。おなごころの。ひをまじし
はコレ。あらしやくと手をとりて。ひきよせらるるふ

どころのうちよつとりあすちどりのころろし^{三下}むら
ささのそめちやわりの花あやめいながれがひやめかか
まつばた^{本道}。あな争や。あま士と。あま中をへたつる
あちろ。あま目さまし。かつける。あま分なり。

以下全て
白紙

早稲田大学図書館

011688994561